



2013年3月 第11巻第3号

### かく語りき—聖人の言葉

「私はあなたの真の母です。あなたのグルの妻だからではなく、うわべだけの言葉で言っているのではなく、本当に母なのです」

(ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー)

「本心から言おう。たとえラーヴァナ自らが庇護を求めて私の下にやって来ようと、私はためらうことなく受け入れるであろう」

(シュリー・ラーマ)

### 今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・5月の予定
- ・スワミー・ヴィヴェーカーナンダ 生誕 151 周年記念祝賀会、協会本部にて開催
- ・「スワミー・ヴィヴェーカーナンダの教え—バクティの理想とヴェーダーンタの知識の融合」

スワミー・シャマーナンダジによる講話

- ・スワミー・メーダサーナンダ、2013年3月にマニラを訪問
- ・「宗教と無宗教」 2012年夏季リトリート スワミー・メーダサーナンダの講話 第1部
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

### 5月の予定

#### ・ 生誕日 ・

- シュリー・シャンカラチャーリヤ  
5月15日(水)  
シュリー・ブッダ  
5月25日(土)

#### ・ 行事 ・

- 5月4日(土) 14:00~16:00  
東京・インド大使館例会  
講義: バガヴァッド・ギター (無料)  
場所: インド大使館 : 03-3262-2391  
お問い合わせ: 逗子協会 046-873-0428

5月12日(日)、19日(日)、26日(日)  
ハタ・ヨーガ・クラス 14:00～15:30  
場所：新館アネックス \*体験レッス  
ンもできます。  
お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

5月11日(土) 17:00～  
シヴァーナダ・ヨーガ東京センター  
講話  
詳細：<http://www.sivananda.jp/>

5月19日(日) 10:30～16:00  
逗子定例会  
場所：逗子本館  
お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

5月24日(金)  
ホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活  
動  
現地でのお食事配布など。  
お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

5月25日(土)  
関西地区講話 13:30～17:00  
場所：大阪研修センター  
内容：「バガヴァッド・ギーターとウパ  
ニシャッドを学ぶ」

## スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生 誕 151 周年記念祝賀会、協会本部にて 開催

2013年2月17日(日)、日本ヴェー  
ダーンタ協会では逗子例会の全日プロ

グラムとしてスワミー・ヴィヴェー  
カーナンダ生誕 151 周年記念祝賀会を  
開催しました。祝賀会の準備は前日か  
ら開始され、ボランティアの方々によ  
り清掃、チラシの作成などが行われま  
した。



当日は午前6時よりマンガラ・アーラ  
ティ、聖句詠唱、賛歌朗唱、瞑想を行  
い、7時45分から朝食をいただきました。  
朝食後、ボランティアの方々が手  
分けして残りの準備に取りかかり、逗  
子本部別館(アネックス)には祭壇、  
礼拝用の台、イスが設置され、色とり  
どりの花が飾り付けられ、礼拝用の道  
具が揃えられました。また、別館入口  
の階段横には受付と記帳台が用意され、  
駐車場係が待機しました。



午前 11 時、祭壇には供物や花輪などの準備が整い、スワミー・メーダサーナンダが礼拝とアーラティを執り行いました。そして参加者全員に花のつぼみが配られ、花の奉獻（プシュパンジャリ）が行われました。

その後いったん本館に場所を移して、皆で昼食のプラサードをいただきました。本館 1 階と 2 階の集会室には、食事のためのテーブルがボランティアの方々によりすでに並べられてありました。昼食はビュッフェ形式で、1 階の配膳台前に各々がトレイを持って並び、ボランティアの方々から料理をよそってもらいました。



午後 2 時 30 分、別館で午後のプログラムが始まりました。聖句詠唱、『カルマ・ヨーガ』の輪読の後、マハーラージが特別ゲストのスワミー・シャマーナンダジをユーモアいっぱいになかよく紹介しました。シャマーナンダジはラーマクリシュナ僧団の日本人僧侶でアキラ・マハーラージと呼ばれており、マヤヴァーティ・アドヴァイタ・アーシュラムに常駐しておられます。このアーシュラムはアドヴァイタ・ヴェーダーンタ（不二一元論）の研究・実践の場所であるため、写真や像は一切礼拝されず、たとえシュリー・ラーマクリシュナの御写真であっても例外ではありません。ここでは、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの定めたアーシュラムの理想に従い、敷地内に写真や像を一切置かないことになっています。アドヴァイタ・アーシュラムは、ラーマクリシュナ僧団の英語とヒンディー語の出版物を主に出版しているセンターでもあり、コルコタにある同アーシュラムの支部で主にその活動が行われています。また、マヤヴァーティで慈善病院も運営しています。

シャマーナンダジは、「バクティの理想とヴェーダーンタの知識の融合」をテーマとした講話を日本語でされ（講話は本号に掲載）、横田さつき氏が英語への通訳を行いました。

その後、文化プログラムとして、ロニー・ハーシュ氏がウクレレを弾きながら英語の賛歌を歌い、メーダサーナンダジーがハルモニウムを弾きながらインドの賛歌を歌いました。その後、皆で瞑想しました。午後4時30分、残っている参加者は本館に移動して茶菓をいただきました。

午後6時30分、本館礼拝室で夕拝が行われ、一日のプログラムが終了しました。

## 「スワミー・ヴィヴェーカーナンダの教えーバクティの理想とヴェーダーンタの知識の融合」

### スワミー・シャマーナンダジによる講話



私たちが今日得られるヴィヴェーカーナンダの教えは、彼の講演や手紙、会話によるものです。一つの講演の中には多くのトピックが含まれていて聞いている人には面白いかもしれませんが、一つの教えを理解しようとする時にはある困難に出会います。それは、ある講演では言われなかったことが他

の講演に入っていることが多くあるからです。例えば、『ギヤーナ・ヨーガ』や『バクティ・ヨーガ』などという本はいくつかの講演を集めて本にしたものです。ですから、ギヤーナ・ヨーガが何であるかを知ろうとするなら、それらの全部から要点を集めて理解しなければなりません。それで今日は、彼の教えの本質、彼が最も言いたかったこと、彼の講演すべての下に流れている教えを簡単に私なりに述べてみたいと思います。

話はさかのぼって、シュリー・ラーマクリシュナがまだ生きていらっしゃった頃の一つの出来事から始まります。それは、ヴァイシュナヴァの宗教についてシュリー・ラーマクリシュナが弟子たちと話をしていた時のことです。ヴァイシュナヴァの宗教は信者に三つのことを実践するように教えています。一つは神の名を唱えること、二つにはすべての生き物への慈悲、そして三つ目にはヴァイシュナヴァ信者への奉仕です。話の途中でシュリー・ラーマクリシュナは、すべての生き物への慈悲と言うや否や突然サマーディに入られました。そして少し意識が戻られると、彼はつぶやきました。「生き物への慈悲、生き物への慈悲だって！何てばかげたことだ。地上を這うつまらない虫けらにすぎないのに他に慈悲を示すというのか！他に慈悲を示すというお前は一体何者なのか。そうじゃない、他への

慈悲ではなく、むしろ他を神の表れとして認め奉仕することだ」とおっしゃいました。

多くの弟子たちがその時いましたが、この言葉を聞いてその深い意味を理解したのはナレンドラ、後のヴィヴェーカーナンダだけでした。彼は言っています。「何と見事にヴェーダーンタの知識とバクティの考えを調和させたものだ。普通ヴェーダーンタの知識は世間を離れ人間的感情のないドライなものだと考えられがちなのだが、私は師の言葉からそれが社会の中で誰もが実践できるものと分かった。もしそれが神の御意思ならば、遠からずこの偉大な真理を私が世界に説く日が来るだろう」と。そして1893年にアメリカのシカゴで宗教会議が開かれた時、かつてのナレンドラはスワミー・ヴィヴェーカーナンダとしてこの会議に参加し、この真理を世界に向けて説き始めました。今日私たちはその教えの多くをスワミー・ヴィヴェーカーナンダ全集として持っています。そしてその教えの根本は、すべては神の表れのみであるということなのです。

さてこの教えはシュリー・ラーマクリシュナがナレンドラに初めて説いたものなのではないでしょうか。なぜなら、インドではヴェーダ聖典の支持がなければ真理とは認められないからです。実は、この教えは非常に古く、ヴェーダの時

代から説かれていたものなのです。例えば、イーシャー・ウパニシャッドを見てみましょう。このウパニシャッドの最初の行は、「何であれこの世の全てのものを神によって覆え」と説かれています。マハトマ・ガンディーは、インドから全ての聖典がなくなっても、この一行が残っていればヒンドウイズムは残る、と言っています。なぜなら、これがヒンドウイズムのエッセンスだからです。

シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッドはもっと具体的に言っています。

(2.16) 全ての所にいるのは彼（神）である。彼は人の背後に立ち、彼の顔は至る所にある。

(2.17) 自ら輝く主は火の中、水の中、全世界の中、草や木の中にもいる。

(4.3) 汝は女なり、汝は男なり。汝は少年なり少女なり。汝は杖に寄りかかって歩く老人なり。様々な姿を取っているのは汝のみなり。

では、どのように全てに神を見ればよいのでしょうか。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドは言っています。

(2.4.5) 夫は、夫故に愛されるのではなくアートマン故に愛される。妻は、妻故に愛されるのではなくアートマン故に愛される

これらは、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの講演の中にも多く引用されているものです。その言いたいことは、私たちの愛の対象となっているものは神なのだということです。たとえそれが犬や猫、草花であろうと、私たちは知らず知らずにそこに神を見ているからそれらを愛するのです。ヒンドゥー教では神の一つの名としてハリというのがあります。それは、私たちの心を奪う者という意味です。私たちの心を奪っている者、私たちの心を惹きつけている者は神だということです。極端な言い方をすれば、神を求める必要はありません。なぜなら、神があなたを惹きつけているからなのです。神を知らなかったら、神を求めることができるでしょうか。ここにあるシュリー・ラーマクリシュナの御写真を神として礼拝することができるなら、どうして私たちの周りにある草木、動物、人々を神として礼拝することができないのでしょうか。私たちは見知らぬ人にも挨拶をします。その時、私たちは相手の中に何を見て挨拶しているのでしょうか。同様のことは、子供や動物についても言えます。私たちは犬や猫に話しかけますが、一体何を見て話しかけているのでしょうか。少し考えてみてください。

最後に、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの詩を引用しましょう。この中に、彼の教えのエッセンスがあります。

聴きなさい、友よ、私は心の中を打ち明けましょう

人生の中で、私はこの最高の真理を発見しました

人生という渦巻きの中で波に打ちのめされている人よ

一つのフェリーだけが海の向こうに連れて行きます

礼拝儀式や呼吸制御、

科学や哲学、様々なシステム、

これらは全て心の迷い以外の何ものでもありません

愛、愛のみが唯一の宝です

与えなさい、全てを与えなさい

お返しを求める時、富に満ちる大海は一滴の水にまでなります

全てが神の表れであると知る時、本当の愛が生まれ、また自分も神であるということを知るのです。その時、ヴェーダーンタの知識とバクティの愛が同じものだと悟るのです。要は、全ては神の表れである、それがインドで古くから伝えられてき、またシュリー・ラーマクリシュナやスワミー・ヴィヴェーカーナンダによって再び述べられた教えなのです。

## スワミー・メーダサーナンダ、2013年3月にマニラを訪問

2013年3月7日（木）夕刻、スワミー・メーダサーナンダの乗った東

京・成田発の ANA のフライトが、マニラのニノイ・アキノ国際空港に定刻通り到着しました。空港では、フィリピン人、インド人、イタリア人という国際色豊かな数人のグループが、マハーラージを待っていました。



マハーラージはマニラに來訪されると、休む間もなく必ず、朝晩の礼拝とアーラティ、輪読の先導、『バガヴァッド・ギーター』や『ラーマクリシュナの福音』に関する説明、信者との個人的面談、公開講話をされます。



これに加え今回の訪問では、フィリピン・ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会 (Ramakrishna Vedanta Society of the Philippines) と在マニラ・イ

ンド大使館が共催するスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕 150 周年記念祝賀会の準備が、その大きな目的でした。祝賀会のプログラムや活動計画について、マハーラージは信者の方々と長時間打ち合わせをされました。また、3月9日(土) 午後に開催された実行委員会の会議でも、何時間も討議されました。

フィリピンの協会は 2006 年に正式に法人化された非営利団体で、マハーラージの靈的指導の下に運営されています。インドや世界各国では今年、スワーミーの生誕記念祝賀行事を一年にわたって開催しますが、フィリピンの協会でもこれに足並みを揃える形でスワーミーの祝賀会を開催したいと考えています。しかし、カトリック教徒が圧倒的に多いフィリピンでは、スワーミーの名は今のところあまり知られておらず、また協会の人的・財的資源も限られているため、これは簡単なことではありません。が、マハーラージの滞在中、開催の目処が立って企画も練られ、9 月中にマニラで開催する予定となりました。

滞在中、マハーラージは約束や予定の合間を縫って、仏教寺院三か所を訪問しました。一か所目は、協会から遠くない所にある美しい装飾の大きなお寺でしたが、ここは参拝者の受け入れにあまり熱心ではないようでした。マハ

ーラーと信者一名はしぶしぶ参拝を許可してもらい、冷淡な対応に短時間でお暇しました。ここは、中国系フィリピン人のためのお寺であるということが分かりました。



3月10日(日)午前、マハーラーと数名の信者らは、マニラの旧市街(今日のマニラ中心地は複数の市が集まったもので、マニラという都市名はこれらの市の名前の一つを取ったものです)にある仏教寺院二か所を訪問しました。一つ目のお寺は非常に古く、雰囲気の良い所で、木造の建物は長年にわたり線香の煙でいぶされ黒くなっていました。受付はとても気さくで感じがよく、驚いたことにこのお寺は寄付を受け付けませんでした。中国人、フィリピン人など誰でも参拝できました。ここには短時間参拝して、近くにある次の寺院へ向かいました。

二つ目の寺院はマブハイ寺院(Mabuhay Temple)と呼ばれる所で、非常に大きく現代的なデザインが印象的でした。(ここは築一年だということ

が分かりました。)マブハイ寺院は、台湾の仏教の尼僧団が運営しています。マハーラーはこの尼僧と数人のフィリピン人学生から温かい歓迎を受け、本堂を参拝できました。本堂では、英語で行われている日曜朝の法話がちょうど終わるところでした。その後マハーラーは、お寺の敷地内にあるレストランで提供しているベジタリアン食の味見に招待されました。

さらにこの後、マハーラー一行は日曜朝の「巡礼」の締めくくりとして、マニラ・ヒンドゥー寺院(Manila Hindu Temple)も参拝しました。このお寺はヒンドゥー教の複数の神様をお祀りしており、数年前にマハーラーが公開講話を行った場所です。この日はちょうどMaha Shivaratriのお祭りだったため、お寺はたくさんのインド人で混み合っていました。マハーラー一行は温かいもてなしを受け、プラサードをいただきました。

同日午後、マハーラーは協会本部で公開講話を行いました。テーマは「スワミー・ヴィヴェーカーナンダの説いた、異なる悟りの道の融合(The Synthesis of Paths of God Realisation According to Swami Vivekananda)」で、参加者は約30名でした。

3月11日(月)午前、マハーラーはマニラを発ち日本への帰路に就かれ

ました。

(エンリコ・コロombo氏寄稿)

## 「宗教と無宗教」

### 2012年夏季リトリート スワーミー・ メーダサーナダの講話

#### 第1部

#### 1. 「宗教」を支える哲学、「無宗教」 を支える哲学

「神」は聖典において、ブラフマン、  
純粹な意識、絶対の真理、永遠の存在、  
靈的存在と呼ばれます。そのことを踏  
まえ考えていきますと、無宗教とは神  
を信じないこと、つまり靈を信じない  
ことであり、宗教とは神や靈を信じる  
こととなります。無宗教であるという  
ことは、靈はすべての本源ではない、  
すなわちすべては物質から派生した、  
物質が靈をつくるとする哲学（唯物論）  
に立脚しています。その反対に、靈、  
神からすべてが派生した、すなわち宇  
宙の創造主の本質（＝純粹意識）がす  
べての源である、という考えは、宗教  
を支える靈的哲学といえるでしょう。  
前者の代表としては共産主義がありま  
す。

#### 2. 伝統的信仰

神、靈、永遠の存在、絶対の真理とい  
うものを昔は信じており、これらは生  
活の中心にありました。現代人の多く  
が神を信じなくなった理由をこれから

考察してみようと思います。

#### ①科学者

科学者は「神の存在は証明不能だ。証  
明出来ないものは存在しない」とか「頭  
腦的・科学的・物質的な方法で神の存  
在を検証したがそんなものは存在しな  
かった」として神の不在を断言してき  
ました。そして人々は自分自身で検査  
分析することなく、科学者を現代の予  
言者のように見なし、迷信を信じるが  
如く彼らの言うことを信じてきました。

#### ②完全なる無神論者

多くの人々は、神様は必要ない、お金  
や専門家の力を借りればすべての問題  
は自分で解決できると考えています。  
難病さえ薬で対処できるようになった  
現代ではこのような考えも生じ得ます。

#### ③世俗的楽しみに埋没した生活

さらに、世俗的楽しみの形が巧みにな  
り簡単に手に入るため、多くの人々は  
おのずと神様から心が離れ、神様のこ  
となど考えなくなりました。

以上三点は多くの国でよくあること  
ですが、次に日本人が無宗教である独  
得な理由を見ていきましょう。

#### ④仏教の弱体化

一つには僧の結婚が許されたことに  
より、僧の生き方が変わったことにあ  
ります。家族を養うために靈的実践の

時間をあてがう必要が生じ、お坊さんが信者を導く時間が減りました。美しい仏様をまつても、瞑想や礼拝、霊的实践を定期的に行わなければお寺独特の雰囲気は出ません。だから信者がお寺に行きたいと思わなくなっています。

#### ⑤明治政府の神仏分離令（神仏習合の廃止）

1868年、明治維新により明治政府のもと日本が近代化されると、新しい規範を必要とした政府は、天皇を神とあがめる神道を国家の基盤に据えました。結果として廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）運動が起き、これ以降日本文化や生活の中における仏教の位置付けが大きく変化していきました。

#### ⑥昭和天皇の人間宣言

第二次世界大戦での敗戦後、連合国占領軍の圧力にさらされ、神とあがめてきた天皇が人間となりました。このことは、神への不信感や疑念が生まれる一端となりました。

#### ⑦家庭で仏壇にお供えをして手を合わせるという伝統が消えつつあること。

#### ⑧宗教教育がない。

さらに、宗教的教えを学ぶチャンスが学校にも家庭にもほとんどありません。

現在の風潮では、平均的な人の信仰は浅くて表面的です。一年に一回祈れば十分。初詣の時、おみこしをかつぐ時と、困った時に祈ります。深刻な問題が起きるまでは、神様のことなど考えません。現代は、心の問題、身体の問題、家族の問題、人間関係の問題、就職の問題と様々な困難があふれているのに、一時的な祈り、はやりのヘルプやサポート（例えばパワースポットやスピリチュアルヒーリング）で満足しています。このような状態で永続的な安らぎ、喜びが得られるのでしょうか。

### 3. 神の存在についての物語

神様の存在について、美しく示唆に富んだお話を一つしましょう。若い王が老大臣に命令しました。「神の存在、神の遍在、神の全能を一週間以内に証明せよ、さもなければ絞首刑にする」恐怖におびえながらその方法を案じていた大臣に、召使いから助け舟が出されました。「私が答えてさしあげましょう」そして、一週間が過ぎました。

大臣は召使いを連れて宮廷に参上しました。宮廷は、事の成り行きを見ようという人でいっぱいでした。大臣は王に、召使が代わりに答えると告げ、王は同意しました。インドの伝統では質問者は生徒、回答者は師とみなされます。召使いはこの伝統に従って、師である自分が玉座に座り生徒である王

は控えて回答を待つことを要求しました。王は仕方なくこれに従いました。

召使いはミルクを持ってくるように言い、王に尋ねました「このミルクの中にバターはありますか」王は「あるけれども見えません」と答えました。「なぜですか」「ミルクのままではバターは見えません。バターを作るプロセスを経ないとバターは現れません」「そうです」召使いは答えました。「神も同様です。プロセスを経ないと見えないのです。神様を見たいならバターのようにプロセス、つまり霊的修業が必要なのです」

二つ目の問いにはろうそくを使って説明しました。「ろうそくの火は、力を使わなくともあらゆる方向に光を放ち、部屋を光で満たすことができます。同様に、神様は意識という形で宇宙に遍満しているのです」

三つ目の問いに対しては、こう答えました。「私はただの召使いですが玉座に座っており、あなた様は王様であられるが私より低い所に座ってられます。つまり神様は不可能なことを可能にされます。神様は全能なのです」

#### 4. 神の存在を支持する意見

この物語のように霊的な事柄の証明方法は独特です。迷信の神を信じるに

せよ、真理の神を信じるにせよ、個人個人で検証していかなければなりません。自分で検証しなければ、迷信の神にも真理の神にも深い信仰を持つことはできませんね。

では、神がいるのかいないのか、などの霊的事柄はどのようにして検証すればよいのでしょうか。物質的な事と霊的な事では証明方法がまったく異なるということを覚えておかねばなりません。なぜなら

⑦霊的なものはとても精妙で、普通の道具（推理・科学的装置など）では証明することは出来ません。

⑧そのうえ物質は有限です。時間と空間にしばられています。霊は無限です。有限なもので無限をはかることは実際に出来ないことはお分かりでしょう。

ですから次の三つの道具すべてを使って検証します。

- ①聖典や聖者の経験
- ②論理
- ③自分の経験

まず①に関してですが、聖書、ヴェーダ、ウパニシャッドなどの聖典には霊的真理が述べられています。しかし注意点は、聖典は霊的真理が誰にでも分かるように、たとえ話など想像の部分があるかもしれないことです。

次に、「聖者の経験」、すなわちイエス、ラーマクリシュナなど霊的な人、悟りを得た人の経験がどういう理由で証明の道具となりうるのでしょうか。霊的になるとまず道徳的になります。道徳的にならないと霊的に進化しないとも言えます。真に道徳的であるとは「いつも正しい」ということです。すなわちうぬぼれがなく、怒りがなく、嫉妬、幻惑、肉欲がなく、そしていつも真実を実践しているということです。ですから悟った人は絶対にうそは言いません。うそがつけないのです。そしてそれが、信じるに足りる理由なのです。

②については、論理の例を挙げましょう。「意識がある」のを「人間」、「ない」のを「コンピューター」としましょう。その違いは何ですか。人間は自分で動けますが、コンピューターは動きません。コンピューターはデータのインプットや命令が必要です。自分で自分のスイッチを入れることはできません。「意識がある人間」がスイッチを入れるのです。物質は、意識のある存在がなかったら、自分で動くことはできず、自分を作ることもできません。こうして論理的に考えていくと、宇宙の創造には意識を持つ創造者が必要なのだという結論に達します。論理的識別の末、そのマクロレベルの「意識」を神と呼ぶのです。

③についてですが、霊的な事を確信す

るには自らの経験が必要です。それには、さまざまなヨガを実践する必要があります。バターを得るにはプロセスが必要なように、霊的な事柄を検証するには特別な実践が必要です。科学者の問題点は、推論という方法だけで霊的真理を証明しようとすることです。霊的真理は推論だけで捉えることはできません。ある点を過ぎたところで推論を超越しなければならないからです。推論を超越するには、肉体、感覚、心、知性の特別な訓練が必要ですが、科学者はこの点を認識していません。このため、霊的真理が幻想のように思えてしまうのです。

シュリー・ラーマクリシュナはあまり勉強をしていませんが、霊的真理を自分で経験しました。「あなたはただの石の像ですか。それとも本当の女神様(サッチダーナンダ)ですか」とカーリー女神にただ一つのことだけを確認したかったのです。その経験だけを祈り続けました。この探求に費やした12年間はとても大変でしたが、ある日光明が目の前に現れ、成就しました。普通の人は知識があってから体験です。最初が花、あとから果実です。シュリー・ラーマクリシュナの本当におもしろいところは、最初に果実、あとから花を得たところでは、最初に悟りを得たのです。自分が経験したものと聖典で述べられていることが同じであるとあとから知り、彼はとても喜びまし

た。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダは大学で学びながら様々な聖典を勉強していました。西洋哲学の勉強をし始めて神の存在に疑問を持ちました。そこで様々な霊的指導者を訪ねては「あなたは神を見たことがありますか」と尋ねました。彼らは聖典を引き合いに出し神の存在を説きましたが、スワミーの質問には答えられませんでした。ある日、スワミーはシュリー・ラーマクリシュナのもとへ行き、同じ質問をしました。彼は、よどむ間もなく「私は神を見ていますよ。それだけではなく、あなたに見せることもできます」と答えました。

「You must realise whether or not there is a God.」とはスワミーの言葉です。例えばアメリカを知りたいのなら、勉強だけで十分でしょうか。実際に行ったほうが何倍も強力な知識となるでしょう。経験とは最も強力な知識です。科学者が霊的経験をせずに書いた無神論の本は、一時的に売れても、しばらくすると忘れ去られています。しかし、ブッダ、イエス、ラーマクリシュナなどの教えは、彼らが亡くなったあともどんどん拡がって、支持されています。この違いは何でしょうか。それは真理です。自らが悟った真理、経験した真理、アヌーバヴァ(anubhava)だから強力なのです。こ

れが、神様の存在を証明する三番目の基準です。

(第二部は、次号のニュースレターに掲載の予定です。この講話は、田辺美和子氏による記録を一部編集したものです。)

## 忘れられない物語

### 祈りを知る

ある晩、ブルーノ修道士が祈りを捧げていたとき、ウシガエルのゴーゴウ鳴く声に邪魔をされました。鳴き声を無視しようといろいろやってみましたがうまくいかなかったので、窓を開けて、「静かに！私はお祈りの最中なんですよ」と叫びました。

ブルーノ修道士は聖人だったので、彼の命令は直ちに聞き入れられました。祈りにふさわしい静けさが得られるよう、どの生き物も声を出しませんでした。

ところが今度は、別の声がブルーノの祈りを邪魔しました。内なる声がこう言ったのです。「おそらく神は、あなたの聖歌詠唱と同じくらいそのカエルの鳴き声にお喜びになるであろう」

「カエルの鳴き声の何に神はお喜びになるんですか？」と、ブルーノはさ

げすむように言い返しました。

しかし、声は続けました。「なぜ、神はその声を創り出されたと思うかね？」

ブルーノは答えを見つけることにしました。そして、窓から身を乗り出して「歌いなさい！」と命令しました。一定のリズムに乗って鳴くウシガエルの声があたり一面に響き、近くにいるカエルたちがそれに合わせて伴奏するかのようにつけいに鳴きました。ブルーノは、その声をしみじみと聞いたとき不快な気持ちは消え、逆らうのをやめれば、実はカエルたちの鳴き声は夜の静けさを豊かにしているのだと気付きました。

これに気付いたブルーノの心は森羅万象に融合し、生涯で初めて、祈りとは何かを理解したのでした。

(S・J・アントニー・デ・メロ 『蛙の祈り』)

## 今月の思想

「あなたの探しているものは全て、あなたのかぶった仮面の裏にある」

(スティーブン・C・ポール)

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)